思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し (5)

— 思春期の悪に対する高校時代と大学時代のとらえ直しの比較 —

鹿島達哉

(広島国際大学心理科学部)

キーワード: 青年期、悪、とらえ直し

Adolescent Students' Reframing of "Hard" Experience during Puberty

Tatsuya KASHIMA

(Faculty of Psychological Science, Hiroshima International Univ.)

Key Words: Adolescence, Reframing, Puberty

目 的

思春期はさまざまな悪と接触する時期であり、自己・仲間・大人(親、教師)、社会に対する見方と関わりが負の方向に変容するが、青年期にとらえ直しが生じる。鹿島(2017)はその過程を発達のモラルレジリエンスとしてとらえるモデルを提案した。鹿島(2018)では思春期にどのような悪と接触したかを整理した。本研究では思春期の悪との接触体験を高校時代と大学時代にどのようにとらえ直したかを自由記述から明らかにする。

方 法

調査対象: X大学の心理学系講義の受講生(1~3年次開講科目各1、計3科目)、男子114名、女子87名、計201名。調査項目: 1) 中学生のときに接した「悪」の体験、2) そのときに感じたこと・考えたこと・行ったこと、3) その後(高校時代)の変化、4) 今からの振り返り、5) その他について記述を求めた。本研究では3)と4)について分析を行った。

結 果

3) 高校時代と4) 大学時代(現在)のとらえ直し、それぞれ195と183の記述を分析の対象とし、「悪の否定」「見方の変化」「悪への対応」「悪の肯定」「無変化」「将来への心構え」に分類した(表1)。以下の()は(高校, 大学)の数。

悪の否定(32, 43)はカテゴリーが対応しているが、「許せない・よくない(8)」と「ない方がいい・やめた方がいい(16)」、「かっこ悪い・なさけない(8)」と「幼い・小さい(10)」、「くだらない(4)」と「バカらしい(11)」とやや意味合いが異なる。「後悔」は(8, 7)で「つらい・悔しい(5)」は大学だけで見られた。

見方の変化(72, 65)は、「誰にもある(7, 6)」「いろいろな人がいる(11, 3)」「周囲・環境の影響(11, 3)」「分化(全否定から部分否定へ)(6, 5)」「思春期の特性(7, 15)」「価値の切り下げ(気にしなくなる)(5, 2)」「原因・過程の理解(12, 13)」と対応が見られた。高校時代には「自分にも原因(7)」「自分を許す(4)」「自己表現としての悪(2)」が、大学時代には「意味づけの変化(9)」「自分は悪くない(4)」「本質を見極める(5)」が独自に見られた。

悪への対応(17, 28)に関して、高校時代では「対応の習得(9)」「悪に近づかない(5)」「予防が大切(3)」が、大学時代では「対応・つきあい方(7)」「対人関係における行動指針(7)」「対人関係における配慮事項(14)」が記されていた。

悪を肯定的にとられる記述(18, 25)には「(いい・学ぶ)体験(7, 18)」「よい面もある(2, 7)」があり、高校時代だけに「少しぐらいはいい」という容認の記述がみられた。

「変化なし(30, 8)」と「影響が持続・残存している(大学のみ7)」という記述も見られた。高校時代には「高校でなくなった・減った」という記述が26あり、それは仲間関係(11)・教師(5)・自分の見方(5)・関わり方(5)の変化によるもの

であった。また、大学時代には「将来への心構え(7)」に関する記述も見られた。

表1 思春期の悪に対する高校・大学時代のとらえ直し

	高校時代	数	大学時代	数
悪の否定	許せない・よくない	8	ない方/やめた方がいい	16
	かっこ悪い・なさけない	8	幼い・小さい	10
	くだらない	4	バカらしい	11
	後悔している	8	後悔している	7
	その他	4	つらい・悔しい	5
見方の変化	誰にもある	7	誰にもある	6
	いろいろな人がいる	11	いろいろな人がいる	3
	周囲・環境の影響	11	周囲・環境の影響	3
	分化(全→部分否定)	6	分化(全→部分否定)	5
	自分にも原因	7	意味づけの変化	9
	自分を許す	4	自分は悪くない	4
	思春期の特性	7	思春期の特性	15
	価値の切り下げ	5	価値の切り下げ	2
	原因・過程の理解	12	原因・過程の理解	13
	自己表現としての悪	2	本質を見極める	5
悪への対応	対応の習得	9	対応・つきあい方	7
	悪に近づかない	5	対人関係行動指針	7
	予防が大切	3	対人関係配慮事項	14
悪の肯定	体験となった	7	体験となった	18
	よい面もある	2	よい面もある	7
	少しはいい・他	9		
無変化	無変化	30	無変化	8
			影響の持続・残存	7
高校	高校でなくなる・減る	26	—	
将来	—		将来への心構え	7
計		195		183

考 察

悪の否定では高校／大学時代で距離の違いが感じられる。見方の変化では高校時代の方が許容的で、大学時代には思春期の特性に帰する傾向が強い。高校時代には「悪への対応」に限定されているが、大学時代には対人関係全般にわたる行動指針・配慮事項が記されている。「(よい・学ぶ)体験となった」「よい面もある」という見方は高校時代にもあるが、大学時代の方が多くなる。「無変化」は高校時代には30と多く、大学時代には8と減るが、「影響が持続・残存している」が7あった。「高校ではなくなる・減る」という記述が26あり、発達課題との関連がうかがわれる(鹿島, 2017)。

引用文献

- 鹿島達哉. (2017). 「発達のモラルレジリエンス」モデルの提案. 広島国際大学心理学部紀要, 5, 55-66.
 鹿島達哉. (2018). 思春期の問題行動に対する青年期のとらえ直し. 日本教育心理学第60回大会.